

WCRP

World Conference of Religions for Peace Japan

2
2025
February
No. **544**



トークセッションでのフランシス・クーリア・カゲマ WCRP 国際委員会事務総長（右）と戸松義晴日本委員会理事長
（1月31日 新春交流レセプション）

こころの扉——『「惟神の道」——世の中を照らす一筋の光——』 橘 重十九……………	2
第50回理事会・第29回評議員会 ……………	3
新春交流レセプション開催 ……………	4
ミャンマーの現状と国際社会への訴え——平和への道を探る ……………	5～6
青年部会「諸先輩からの講演Ⅱ・国際委員会事務総長・ 日本委員会理事との懇談や新春交流レセプションへの参画」を実施 ……………	7
いのちの森プロジェクト 周辺緑地を守る会との懇談会開催 ……………	8
アンケートのお願い ……………	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動 ……………	8



『^{かながら}惟神の道』 一世の中を照らす一筋の光』

WCRP日本委員
理事 北野天満宮宮司

橘 重十九



今、世界は人類の共有認識として構築されてきた理念や価値観、常識が脅かされる状況を目の当たりにしています。世界中に不安と混乱を招いた新型コロナウイルスの流行、国際社会の規律に反し、武力による一方的な現状変更を強いる紛争や内戦等々、いずれも世界は戦後の歴史上、これまで経験したことのない難題を突き付けられています。その背景には宗教や文化、民族の違いによる分断や対立、既存の政権政党に対する反発、土地や資

守の杜」で祈りの祭祀を行い、神々への感謝の心や平和を願う気持ち、神や自然と共存する日本人古来の生き方が、神道における「惟神の道」であり、持続可能な社会を創り、現代社会の混沌とした世の中を照らす一筋の光ではないかと思えます。

北野天満宮をはじめ、全国一万余社を超える天満宮・天神社に奉祀される御祭神菅原道真公の活躍された平安時代における平安京は、まさに戦乱や疫病・飢饉などの難題が繰り返された混沌の時代でした。そのような世の中で、類稀なる学識と縄文時代から連綿と継承されてきた日本人の精神性を「文道」によって内外に示し、誠の心を以て、自国の歴史や伝統を重んじつつ、他国の文化や技術を受け入れる寛容さが、菅原道真公の提唱された「和魂漢才」の精神です。まさに神道の「共存共栄の理念」そのものであります。

激しく変容変化する現代においても、互いの歴史や伝統、文化や風習そして宗教を敬い、認め合い、共有し合い、共に社会を作り上げていく意識と実践が肝要だと考えます。

結びに、世界宗教者平和会議の様々な活動にご尽力されている関係者各位に、心より敬意を表しますとともに、この活動が世界共通の理念や価値観の模範となることを願っております。

源の争奪など、様々な理由が挙げられると思います。そのような世界の諸問題を解決する策は未だ見つかりませんが、古来、日本人の心の中に生き続ける自然観や精神性に問題解決の端緒があるように思います。神社神道には、実践の規範として掲げる「敬神生活の綱領」があります。綱領の中には、万物との共存共栄を祈る神道感が謳われており、まさに今、世界に発信しなければならぬ普遍的価値であると思えます。古より「鎮

第50回理事会・第29回評議員会

第50回理事会、第29回評議員会が1月31日、立正佼成会法輪閣（東京都杉並区）でオンラインを併用し開催された。理事会には理事20人が出席。「日本委員会人事」「2025年度事業方針・事業計画」「2025年度予算」「資金調達及び設備投資の見込み」「第3回東京平和円卓会議」について審議し、可決された。

引き続き行われた第29回評議員会には評議員8人が出席。審議事項はすべて可決された。



理事会の様子

2022年、2024年に引き続き2025年に開催される第3回東京平和円卓会議では、特に、第2回東京平和円卓会議にて採択された声明文がどの程度実行できたのか、この声明文の実行上の課題とは何か、それを実行する



評議員会の様子

ためにも求められている行動とは何か、という問題意識のもと開催されることが確認された。また、ACRPは4月に執行委員会が開かれ、2026年11月に第10回ACRP大会をシンガポールで開催することが報告された。理事会、評議員会ともに審議終了後、ニューヨークから来日したフランシス・クリア・カゲマ国際事務総長があいさつした。WCRP日本委員会の役員の日頃の努力と貢献に感謝の意を述べるとともに、国際委員会と日本委員会が今後さらに協



クーリア事務総長（手前から2人目）

力、連携を強固にして、世界のさまざまな課題に取り組んでいくことを呼び掛けた。

●日本委員会人事で選任された役員は次の通り。（敬称略）。

顧問（理事会が推戴、評議員会が承認）

就任…庭野日鑑（立正佼成会会長）

理事（評議員会で選任）

退任…阿部昌宏（天台宗前宗務総長）

就任…細野舜海（天台宗宗務総長）

活動委員（理事会で選任）

退任…加瀬育代（立正佼成会総務部渉外グループ）

就任…田中希依（立正佼成会総務部渉外グループ）

青年部会（青年幹事会で推薦、理事会で選任）

退任…齋藤侑助立正佼成会国際伝道部国際伝道グループ）※事務局長

就任…長田健祐（立正佼成会総務部渉外グループ）

タスクフォース（理事会で選任）

人身売買禁止タスクフォース

退任…加瀬育代（立正佼成会総務部渉外グループ）

就任…田中希依（立正佼成会総務部渉外グループ）

退任…加瀬育代（立正佼成会総務部渉外グループ）

就任…田中希依（立正佼成会総務部渉外グループ）

退任…加瀬育代（立正佼成会総務部渉外グループ）

就任…田中希依（立正佼成会総務部渉外グループ）

退任…加瀬育代（立正佼成会総務部渉外グループ）

就任…田中希依（立正佼成会総務部渉外グループ）

新春交流レセプション開催

理事・評議員会の後、新春交流レセプションが開催され、日本委員会役員、関係者、賛助会員など約200人が参加した。

第一部では、フランシス・クーリア・カゲマWCRP国際委員会事務総長を迎え、戸松義晴理事長モデレーターのもとトークセッションが行われた。

戸松理事長は、クーリア事務総長との初めての出会いで、互いにWCRPの肩書が記載された名刺を交換し、驚き合ったエピソードを紹介、以下のトークが交わされた。

戸松…趣味と好きな食べ物は。



トークセッション会場の様子

クーリア…
読書が趣味
で、最近
は日本の「
將軍」を
読んでお
茶が好き
で、ケ
ニアの特
別な紅茶を
毎日たく

飲んでい

戸松…平和に向けたビジョンを。

クーリア…私は、平和、調和に基づいた新たな行動様式を構築したい。それは、「分かち合い」によってつくられる世界だ。今の世界は、個人主義、物質主義が蔓延し、誰もが自らの欲望を満たすことに奔走しているように感じる。今こそ分かち合う生き方が必要だ。この分かち合うという生き方に徹したときに、ほんとうの意味での健全な個人・社会が実現すると信じる。

戸松…参加の皆さまにメッセージを。

クーリア…日本は倫理的、道徳的な価値を世界に示すことができる。それは「ゆるし」と「分かち合い」の価値観だ。この価値観を世界に示すことによって新たな行動様式をつくり上げることができる。さらに具体的な変革には、人、資金、アイデアの三つが重要だ。今後とも財的支援を含めた継続的支援をお願いしたい。

第二部では、レセプションが持たれた。

WCRP日本委員会を代表してあいさつに立った杉谷義純会長（天台宗妙法院門跡門主）は、「依然として世界は厳しい状況にあ

るが、ここから学び、私たちができることを手を取り合って取り組んでいきたい」と述べた。次に、日本宗教連盟理事の宍野史生氏（扶桑教管長）が、「今年は巳年です

が、長いへビは長者に通じる。長者はお金持ちという意味もあるが、徳の高い人との意味もある。今年は徳積みのために笑顔を振りまく笑顔長者をめざしたい」とあいさつした。アジア学院の荒川朋子校長の乾杯の発声により交流会がスタート。参加者は出会いと再会の一時を過ごした。最後に、評議員の菊地功枢機卿（カトリック東京大司教区大司教）が、「宗教者は理想を語る



レセプション参加のみなさま

なければならない。分断の進む世界の中で、希望を掲げ平和の歩みが続けて行きたい」と閉会のあいさつを述べた。

ミャンマーの現状と国際社会への訴え ——平和への道を探る

2月3日、世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会は、日本プレスセンタービルで記者会見を開き、ミャンマーの現状と支援の必要性を訴えた。

クーターから4年が経ち、戦闘が激化する中、「国際社会に現状を伝えるため」として、ミャンマーのチャールズ・ボー枢機卿（WCRP国際委員会共同会長）が来日。フランスス・クーリア・カゲマ博士（WCRP国際委員会事務総長）、WCRP日本委員会の戸松義晴理事長らが登壇し、市民の窮状改善と平和実現への協力を呼びかけた。

以下、チャールズ・ボー枢機卿の発言要旨。

深刻化するミャンマー、国際支援が不可欠

ミャンマーは政治・経済・人道的危機に直面し、多くの市民が避難を強いられている。紛争の長期化により生活基盤を失い、国際社会の支援が急務とされる中、日本を

含む各国の関与が求められている。

今後は、ASEANを中心とした周辺国の平和への取り組みが紛争終結のカギとなる。平和への希望はあるが、正義・包括性・非暴力的解決への強い決意が不可欠だ。草の根や国際的な取り組みが続くものの、課題は山積している。

国際社会の役割——関心の低下が課題

世界的な関心はガザやウクライナに向けられ、ミャンマーの窮状は見過ごされがちだ。ミャンマーの関係者が平和に向けた構想に立ち返るよう、国際社会は圧力を強める必要がある。特に日本政府は、平和と和解のための積極的な支援が求められている。

最優先する形で実施されるべきである。

悪化する人道危機と援助の必要性

ミャンマーの人道状況は深刻さを増しており、食料不足や避難民の急増が続いている。

・支援が必要な人々…2025年時点で約1990万人（人口の約三分の一）が人道支援を必要としており、そのうち630万人が子ども。

・国内避難民（IDPs）…紛争による避難民は350万人に達し、わずか15%が正式な避難キャンプに収容されている。
・ラカイン州の危機…経済崩壊と貿易封鎖の影響で、約200万人が飢餓の危機に瀕している。

支援は、
現地の対立を激化させることなく、
平和、発展、人間の尊厳を

・資金不足…2024年のUNHCRの緊急支援要請額4億1,560万ドルに対し、10月時点での確保額はわずか43%。



チャールズ・ボー枢機卿

市民への影響と停戦の必要性

経済の崩壊により、市民の生活は困窮し、多くが最低限の生計を維持することさえ困難になっている。ガザのような他の紛争地域でも、停戦により市民が一時的にでも生活を立て直す機会を得ている。ミャンマーにおいても、停戦が短期的な命の救済だけでなく、長期的な復興と発展の基盤を築くことにつながると期待されている。

ミャンマー国民へのメッセージ

「ミャンマーの皆さん、あなた方の強さと忍耐力は世界の希望の光です。困難な時こそ、団結と平和へのコミットメントが重要です。教育、医療、地域社会の再建を通じて、お互いを支え合うすべての努力が、より良い未来への道を切り開きます。」

日本と世界への訴え

「ミャンマーの未来は、私たち自身と国際社会の支援にかかっています。対話と平和への取り組みを強化し、すべての人が尊厳と希望を持って生きられる未来を築きましょう。」

続いて、クーリア博士よりWCRPの対応が説明された。博士は、ミャンマーにおける市民の苦難を終わらせ、平和を広めるための取り組みを強化する方針を示し「最も重要なのは、市民の窮状を改善し、尊厳を向上させること」と述べた。

宗教界の団結と国際協力が鍵

「問題は複雑であり、課題は多い。しかし、人間が解決できない問題はない」とクーリア博士は語る。ミャンマーの平和を実現するためには、WCRP日本委員会をはじめ、日本政府や国際社会の尽力が不可欠だとし、「協力があれば必ず道は開ける」と



クーリア博士

の信念を示した。また、ミャンマーの宗教界や市民社会の声を国際社会に届けることの重要性も指摘。「多くの声の一つになれば、市民の励みとなり、平和実現の大きな力となる」とし、宗教界の役割を強調した。

「平和へのチャンス」を国際社会への呼びかけ

クーリア博士は、ミャンマーにおける人権と尊厳の回復を訴え、「平和へのチャンス」を、そしてミャンマーに機会を」と国際社会に呼びかけた。「私たちが住むこの地球に、もう一度平和へのチャンスをいただきたい。平和は実現可能であり、私たちはその実現に向けて尽力する」と強い決意を表明した。

現在、ミャンマーは歴史的な岐路に立たされている。長引く紛争は国民の生活を圧迫し続け、国際社会の関与がなければ事態の改善は困難であろう。持続的な平和への道を探るため、日本をはじめとする国際社会の積極的な関与と支援が求められている。

**青年部会「諸先輩からの講演Ⅱ・国際委員
会事務総長・日本委員会理事との懇談や新
春交流レセプションへの参画」を実施**

青年部会は1月30日から31日『諸先輩からの講演Ⅱ』ならびに『草の根活動Ⅰ・Ⅱ』を実施した。

30日に、立正校成会法輪閣で第3回幹事会を開催し、その後に開催された諸先輩からの講演Ⅱでは、神谷昌道師（ACRPシニアアドバイザー）を招き講演をいただいた。自らも青年部会幹事を務めた神谷師は、まず10代〜30代の青年期における体験を語った。自身の信仰する立正校成会で青年部の会員と出合い、米国・フレッチャ―法律外交大学院留学に繋がる転機となった出来



人民主権の大切さを考える時間

事を述懐する中で、「自らを過小評価しないということを大事にしてもらいたい」と強調した。また、自分自身の気持ち奮い立たせるために「元気・本気・根気という3つの気を大事にしても



幹事は積極的に英語でコミュニケーション

P 国際委員会事務総長）との懇談を行なった。クーリア博士は懇談の中で青年独自の可能性について言及し、「青年は信仰をベースとする諸活動を通して、よりよいものへ



諸先生と積極的に交流

トークセッションを聴講した。その後、第2部の交流レセプションでは様々な立場の方々の交流・歓談を通じて青年部の発信活動を行った。

らいたい」と励ました。

続いて神谷師は自身が作成した論文などを用いて、国家主権から人民主権への大切さに触れ、「国家権力中心ではなく、それぞれの国に属する人民に視点を充てて、その人々が平和に暮らせるためのコモングッド（共通善）を尊重できる仕組みが大事である」と強調した。さらに、平和構築のための3つの宗教者の役割として、①国際秩序の守護者になること②人間の倫理性・道徳性・精神性を豊かにすること③現実を理想へと導く推進力となることを挙げ締め括った。

とリフレッシュするチャンス有している」と励ました。草の根活動Ⅰでは、日本委員会の理事と昼食を取りながら懇談・交流を行った。これは「共食を通じて、理事の人柄に触れ、先輩から学びたい」という青年部会幹事の希望により実施された。青年部会に携わった理事も参席される中、自教団のことや自身の関心のあること、世界の平和など多岐にわたる内容を共に語り合い、時には笑い声も響き渡った。

草の根活動Ⅱでは新春交流レセプションへ参加した。司会を新島公彰青年部会幹事（妙智會教団青年部副部长）が務めた。青年部会幹事は参加者に混じって第1部の

いのちの森プロジェクト 周辺緑地を守る会との懇談会開催

埼玉県所沢市において、2017年から取り組んできた「いのちの森づくりプロジェクト」も今年で8年を迎えた。約2万本の伐採された竹で覆われた山の斜面は、植樹と適度な除草作業により里山の風情を維持している。

この森プロジェクトは、3人の地権者によって設立された「堀口天満神社周辺緑地を守る会」と、懇談会での意見交換を重ねながら取り組んできた。

2月4日、2024年度第3回懇談会を堀口自治会館で開催。出席者は、守る会会



右から2人目から中村明会長、中村典之氏

長の中村明・夫妻、中村典之氏、長谷川悦夫アドバイザー、事務局から3人であった。この日は、春開催するタケノコ掘りや今後の長期的な管理

のあり方について意見交換を行った。タケノコ掘りは4月に開催することを確認。管理のあり方については、WCRP日本委員会が取り組み始めて10年となる2026年を区切りとし、以降は地権者の皆さまが主体的に管理していく方向性が確認された。最後に、中村明会長より、竹に覆われた山を整備、管理してきたWCRP日本委員会に対し感謝の言葉が述べられた。

アンケートご協力をお願い

WCRP日本委員会ホームページに関して、国内外の発信強化を目的にアンケートを実施しております。アンケートは左記リンクまたはQRコードを読み込みご回答ください。ご協力をお願いいたします。

<https://forms.gle/iikmX1P>

t3kcmSEJH6



今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し、新しい熟語を作ります。

泰和（たいわ）

互いの立場によって違う意見を話し、理解し、尊重することで心が穏やかになり平和への第一歩に繋がると感じました。

WCRPの活動

《2月》

- 4日 気候危機タスクフォース「いのちの森を守る会との懇談会」（埼玉・所沢）
- 5日 ミャンマーの平和構築に向けた諸宗教と国連／諸団体による円卓会議（東京・フォレストテラス明治神宮）
- 13日 女性部会会合（オンライン）
- 20日 人身売買禁止タスクフォース現地学習会（東京・マスジド大塚）
- 27日 和解の教育タスクフォース第3回会合（オンライン）
- 27日 ストップ！核依存タスクフォース第5回会合（オンライン）
- 28日 第4回総合企画委員会（オンライン）

掲載内容の無断転載を禁ず。